

現代能歌劇「隅田川」台本 原作者：観世十郎元雅（世阿弥の長男）

時：室町時代 春 三月十五日

所：武蔵の国 隅田川の堤

登場人物 狂 女＝息子を人買いにさらわれた女

渡し守＝隅田川の船頭

旅 人＝知人を訪ねて東国に来た男

梅若丸＝幼くして命をおとした狂女の息子

序奏—（静かで雄大に流れる川を表現する音楽）—

名乗りの段（その流れにのって）

渡し守 今日は大念仏が行われます。お坊様をはじめ、このあたりの人たちが集まって念仏を唱えるのです。
（旅人登場）

旅 人 やあ、船頭さん、舟に乗せて下さい。

渡し守 どうぞ。 一間— 向こうが騒がしいですねエ。何ですか？あの騒ぎは。

旅 人 ちょっとおかしな女がいてね。みんなが面白がってるんですよ。

渡し守 そんなら、来るまで待ってみましょう。

一間—（静かで雄大に流れる川の音楽が、ずっと流れている）

今日は大念仏が行われるんです。お坊様やこのあたりの人たちがあつまって、念仏を唱えるのです。

旅 人 そうですか。私は都から来たのですが、こちらに知人がおりまして、これから訪ねるところなんです。私も念仏を唱えさせて戴きましようかねエ。

上げ歌 旅人のアリア「いくつもの山を」—山の音楽—

幾つもの山を越えて来ると、その山が雲や霞にまぎれて、遠くに小さく見えるだけになりました。いくつも関所を通り過ぎて旅した道が思い出されます。東国は遠いところです。

問答（シテの音楽）

狂 女 船頭さん、私も舟に乗せて下さいな。

渡し守 あんたは、どこから来て、どちらまで行くのかねエ。

狂 女 私の子供がさらわれてしまったので、探しているのです。

狂女のアリア「親の心は」（シテの音楽）

親の心は我が子を守るためには、分別を失うっていいです。

私は子供をさらわれて、本当に分別を失ってしまいました。

さらわれた子供の行方を、どう、人に尋ねたらよいのでしょうか。

差し声（シテの音楽）

狂 女 私の家の近く、都の北白河で息子の行方を尋ねたら、
「逢坂の関の遙か遠く、東国へ下った」と聞きました。心が乱れ、そちらに行けば逢えると、迷うように尋ね歩いて来ました。

一声 松の枝に吹き付ける風の音 音沙汰知れぬ息子の知らせを待つ

下げ歌（中音にはじまり、下音を数回の後、下音で終わる）

謡い 千里離されても、親の心の、子への思いは変わらない。

上げ歌（高音に始まり、中音で上下して、下音で終わる）

親子の契りはもともと、この世一代限り、

なのに私と息子は、この世一代さえ、引き離されてしまった。

方々を探して、迷うように尋ね歩いて、尋ねる宛ても尽き果て、ここにたどり着きました。

翔り（かけり）（シテの音楽—狂女の苦悩を表現する能囃子—）

狂 女 荒れ野に降りる露のように儂いこの世

息子と二人の不運を嘆き暮らしています

問答（シテの音楽）

狂 女 ですから船頭さん、私も舟に乗せて下さい。

渡し守 向こうでみんなが面白がった話を、私にも聞かせてくれないと乗せないよ。

狂 女（ゆっくりと）情けない…。 一間— 伊勢物語に隅田川の船頭さんがでて来ます。

その船頭さんが言うには「日も暮れる。早く舟に乗れ」といいます。

あなたも、そう言ってくださらないのですか。

息子の行方を訪ねて、旅してきた女に隅田川の船頭さんとも思えないことを、おっしゃいますな。

渡し守 なーるほど、都の人だけあって「その名にしおう」優雅さだ。

狂 女 伊勢物語の主人公の在原業平は、隅田川の渡し場でこのような歌を詠んでいます。

上の謡い「なにし負はば、いざ言と問わん都鳥、我が思う人はありやなしやと」

（その名の通りなら、ひとこと訪ねたいよ都鳥、私の思う人は元気でいるのかと）

掛け合い

狂 女 船頭さん、（ゆっくりと）あの白い鳥は、何という鳥ですか。

渡し守（当たり前）に答えて）あれは沖の鴨（かもめ）だがね。

狂 女 あーら、隅田川の船頭さんなら「都鳥」と答えて欲しかったです。

渡し守 こーれは間違えた。風雅の心得がないもんで。
 狂女 (ゆっくりと) 沖の鷗ですか。^{つづみ}
 渡し守 夕波に浮かぶ鷗に、業平が(鼓の音 ひとつ)
 狂女 「元気であるかと」尋ねたは
 渡し守 都に残した妻を思って。(鼓の音 二つ)
 狂女 私は息子の行方を尋ね、元気でいてほしい。(鼓の音 三つ)
 渡し守 妻を偲ぶも、(鼓の音 四つ)
 狂女 子を尋ねるも、思いは同じー。(鼓の音 強く一つ)
 渡し守 (ゆっくりと) 人を恋う旅路ー。
 狂女 思えば遠い道のりを旅して来ました。船頭さん、お願いですから舟に乗せてください。
問答
 渡し守 このように、けなげな女人は見たことがない。さあ、舟にお乗りなさい。このあたりは大変深いですから、静かにしててください。 一問一(雄大な川の流れ 舟が岸を離れる音楽)
 (少し間をおいて)
 旅人 和歌「隅田川水面に浮かぶ都鳥 母に寄り添ふ春の夕べに」
 船頭さん、向こう岸の柳の下に、人が集まっていますね。
 渡し守 ああ あれは、このあたりの人達が、これから大念仏を唱えるのです。
 これには可哀想な話があるので、向こう岸に着くまで、その話をいたしましょう。
語り
 渡し守 アリア「それは去年の」(少し間をおいて)
 去年の三月十五日、ちょうど今日のことでした。
 八歳か九歳の子供が人買いに連れられて、ここを通りかかりました。都から奥州に下る途中、慣れない長旅の疲れで倒れてしまいました。
 旅人 それは可哀想に。介抱してあげなければいけませんね。
 渡し守 子供が重い病気にかかっていたので、ひどい人買いは、子どもをうち捨てて、東北へ下って行ってしまいました。
 旅人 なんと薄情な。人の世の情けを知らないのか。
 渡し守 不憫に思って、このあたりの人たちが手篤く介抱したのですが、回復しませんでした。
 前世からの宿命だったのでしょうか。どんどん弱っていくばかりでした。
 旅人 可哀想に。困りましたね。
 渡し守 もう最期かとかと思われた時に、「あなたはどこのどなたか」と尋ねたところ、
 「私は都の北白河の吉田何某と申す者の一人息子。父には先立たれ、母と暮らしてきましたが、人買いに拐かされ、このようなことになってしまいました。この上は、都の人の手足の影でさえ懐かしく、
 渡し守 どうぞ、この道の傍らに埋めて、墓のしるしに柳を植えてしてください」。念仏を唱えてあげると、息を引き取りました。
 旅人 母に、とても会いたかったろうに。
 渡し守 幼い命が失われて、なんとも哀れです。
 旅人 私も大念仏に加わりましょうかね。
 渡し守 さあ、舟が着きました。岸にお上がりください。
問答
 旅人 今日はここに宿をとって、大念仏に加わります。
 渡し守 こおれ、そこのあなた。岸にお上がりなさい。どうして舟から下りないのだ。
 おや、泣いているのか。優しい人だ。もらい泣きか。さあ、岸にお上がりなさい。
 狂女 船頭さん、その子は可哀想でしたねエ。さぞつらかったでしょうね。
 都が恋しかったでしょうね。とても人ごととは思えません。
 ねえ、船頭さん。この話は何時のことですって?
 渡し守 去年の三月十五日、ちょうど今日のことですよ。
 狂女 そうして、その子の年は?
 渡し守 八歳か九歳
 狂女 名前は
 渡し守 梅若丸
 狂女 父の名字は
 渡し守 吉田の何某(なにがし)
 狂女 それで、親さえ尋ねて来なかった?
 渡し守 親類さえも尋ねて来ていない。
 狂女 まして母親さえも、尋ねてこなかったのですね。
 渡し守 それは、思わなかったが、尋ねて来なかった。
 狂女のアリア「ねえ、船頭さん」
 狂女 ねえ、船頭さん。その子は、私が尋ね歩いて、さまい、辿り着いた我が子に違い。
 渡し守 これは驚いた。本当か!
 狂女のアリア「これは夢か」

狂女 …これは夢か。なんと口惜しい。なんと情けない。なんと無念な。

渡し守と旅人の二重唱「よそ事とばかり」

渡し守 さては、あなたのお子でしたか。

旅人 …よそ事とばかり思っていたのに。

二重唱 これはお気の毒に。

狂女 きっと我が子に逢えると思って、ここまで辿り着きましたのに。

渡し守 お子の墓に案内しましょう。…お出でなさい。こちらです。その柳の木の下です。

口説き =慕情や傷心をかき口説く

見知らぬ東国に来たら、我が子はこの世にいない^{さだめ}

…墓の標（しるし）だけになたとは、何とむごい運命なのか。

都を遠くのぞむ東（あずま）の涯（はて）の、道ばたの土となったと儚い命。

春の草の下に眠る不憫な息子。

上げ歌

どうか、どうか、この上の土を掘り返して、もう一度我が子の姿を、母に見させて下さい。

どうか生前の姿をこの母に見させて下さいませ。

この世に残し甲斐のある子供が逝ってしまい、残し甲斐のない母のこの眼に我が子の姿が見え隠れする。

問答

渡し守 今はどんなに嘆いても甲斐なきこと。来世にいるお子のために、念仏を唱えて、弔ってあげてください。

掛け合い 二重唱「満月が昇り」

満月が昇り、川風が吹いて、夜も更け はや夜念仏の時刻になりました。

皆とともに鉦鼓を鳴らし、お子に念仏をあげましょう。

狂女 母はあまりに悲しくて、念仏を唱えることができません。どうか、このまま泣かせてください。

渡し守 どんなに多くの人が念仏を唱えてあげるよりも、お子にとっては、母の弔が一番うれしいでしょう。

さあ、鉦鼓です。嘆きをこらえ、声を澄まして

狂女 西方極楽浄土の 三十六万億世界におあします 同じ名の阿弥陀如来にすがり 願い奉る

三重唱 南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

狂女 隅田川の河風も 大念仏に音を添えて 南無阿弥陀仏

三重唱+ (ヴァイオリンの梅若) 南無阿弥陀仏

問答

狂女 いま梅若の声が聞こえました。今の声は 梅若丸です。(強く) 今 梅若の声が聞こえました。

渡し守 私にも聞こえましたよ。それでは他の人達の念仏を止めて 母一人で唱えて
ください。

狂女 もう一度だけ もう一度だけ 声を聞かせておくれ

謡い 同じ名の阿弥陀如来にすがり 願い奉る 南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

梅若丸 (ステージ裏にて) 南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

狂女 梅若丸か 梅若！

梅若丸 母上でいらっしゃいますか 母上！

渡し守と旅人の二重唱

二重唱 見つめ合う母と子 梅若の姿がそこにある 在りし日の梅若がよみがえる
東雲の空がほのぼのと明るくなり 梅若は 小さく 遠のき そして消えた
春の草の中に 墓の標が哀れであった。 おわり